

## 若きエラスムスと ルネサンス・ヒューマニズム

柳 沼 正 広

### はじめに

「ルネサンス」や「ヒューマニズム」といっても、これらはのちの研究者が生み出した概念であって、エラスムスが用いたものではない。ただ15世紀16世紀を中心に盛んになったルネサンス・ヒューマニズムと呼ばれる古典研究・教育運動の核には、フマニタス研究 *studia humanitatis* という具体的内容をもつ学問があった。それらは、文法・レトリック・歴史・詩・道徳哲学であり、今でいうところの人文学である。このフマニタス研究に携わった人たちは *humanitas* という語にゲッリウス（125頃－180頃）らにならって<sup>\*1</sup>、ギリシア語の *παιδεία* パイデΙΑ（教育・訓練・教養）の意味を込めた。そこでは *φιλανθρωπία* ピラントローピア（人類愛）と対照させて、教育的側面が強調され、古代ギリシア・ローマの学問への強い関心と愛好が表明される<sup>\*2</sup>。

筆者の関心は、エラスムスが、このような学問とどのように向き合っていたかにある。これを知るための大きな手掛かりの一つは、エラスムスが20歳前後の若い時から書き始めたという『反蛮族論』*Antibarbarorum liber* である。この中でエラスムスは、古代の学問を異教のものとして退ける人間たちに対する論駁を行なっている。この『反蛮族論』がはじめて出版されたのはエラスムスが53歳となっていた1520年5月であるが、その時に付された序文の中には次のように記されている。

私が子供のころ学校では、よき文学は全く失われていて、本も教師たちの助けもありませんでした。いかなる名誉も才能のある子に励ましを与えていませんでしたし、どこでも皆がこの学問から遠ざけられ、他のことに駆り立てられていました。それにもかかわらず、私はまるで靈感を受けたかのように、つまり判断ではなく、というのもその頃はまだそのようなものを持ち得たはずがありませんから、しかしある種の自然な気持ちが私を学芸の神々への献身へと駆り立てていったのです。私は、より人間らしい学問に敵対する人たちを誰であれ嫌い、逆にその学問に喜びを見出す人たちを愛してきました。またその学問において何かしら高い評価を得た人たちをまるでいわば神々であるかのように崇め、尊敬してきました。老年となった今でも、このような気持ちを悔いることはありません。<sup>\*3</sup>

これは、エラスムスがフマニタス研究に携わってきたことを振り返った文と言えるだろう。エラスムスは恵まれた環境ではなかったことを強調している。本稿では、幼いころから修道院を出る 26 歳くらいまでのエラスムスとヒューマニズム、彼の言葉でいえば「よき文学」*bonae literae*、「より人間らしい学問」*humaniora studia*、誉ある学問「*honesta studia*」との関わりを断片的にはあるが辿っていきたい。

## I . 幼少期の教育

### I . 1 父のイタリア留学

エラスムスは 1524 年に書いた『自伝』*Compendium Vitae* の中で、自分の父ヘラルトはイタリアで写字生<sup>\*4</sup>として働きながら誉ある学問 *honesta studia* を学んだと書いている。さらにギリシア語・ラテン語に通じ、グアリーノの講義を聞いたとも書いている<sup>\*5</sup>。また父ヘラルトの死後エラスムスが自身の後見人に宛てた手紙の中には、本の扱いについての記述がみられ<sup>\*6</sup>、これらのことから、父ヘラルトはかなりの量の文献をイタリアから持ち帰ったのではないかと推測されている。

グアリーノ・ダ・ヴェローナ (1374 - 1460) は、イタリアの代表的なヒューマニストで、学者としても教育者としてもすぐれた人物だった。ギリシア人マヌエル・クリュソロラス (1350 - 1415) に学び、フィレンツェ、ヴェネツィ

ア、ヴェローナで教えた。クインティリアヌスの伝統を受け継いで文法・レトリックを中心にした古代の学問を教育の根幹に据えていた。だが本当にエラスムスの父ヘラルトがこのゲアリーノの講義を聞いていたかどうかは定かではない。ゲアリーノの息子のリオネッロあるいはバッティスタの講義ではないかとも推測されている<sup>\*7</sup>。

## I. 2 デフェンテルでの教育

エラスムスは初等教育をハウダ Gouda の学校で (1473-75)、中等教育をデフェンテル Deventer で受け (1478-84)、またその後およそ2年のあいだセルトーヘンボス s' -Hertogenbosch の学校に行った (1484-87)。特にデフェンテルで行われていた教育に注目したい。低地地方出身でイタリアに学び、ヒューマニズムの息吹をアルプス以北に伝えた先駆的人物であるルドルフ・アグリコラ Rudolph Agricola (1444-1485) が、エラスムスの在学中にデフェンテルの学校を訪れており、その仲間のアレクサンデル・ヘギウス Alexander Hegius (c.1433-1498) は校長となっている。他にもアグリコラと交流のあった教師が教壇に立っており、重要な感化をエラスムスに与えたと考えられる。

ハウダでの初等教育の後、エラスムスは母親とともにデフェンテルに移り、およそ7年間そこで中等教育を受けることになる。デフェンテルはアイセル川中流の商業的にも恵まれたところに位置し、年に一度国際的な市が開かれていた。また、デフェンテルの教会の学校はよいラテン語を教え、その地方全体から学生を集めていた。デフェンテルは1480年代と1490年代においてヨーロッパで最も出版業が栄えた地の一つであり、当然、低地地方で最も重要な地位にあった。1515年以降アントウェルペン Antwerpen にその出版業の地位を譲ってから、その勢いは傾くが、1490年代末には、パリにおけるよりも多くの古典文献を出版していたほどであった<sup>\*8</sup>。

エラスムスがデフェンテルにいたのは1478年頃から1484年である。この時期はちょうどデフェンテルが、ヨーロッパ有数の出版地としての地位を獲

得していく時期であった。このような変化は学校での教育にも及んでいた。エラスムスはデフェンテルでの教育について、1524 年の『自伝』の中で振り返って次のように述べている。

その学校は、その頃はまだ野蛮なものであった。Pater meus<sup>\*9</sup>を読まされたり、時制をおぼえさせられたりしていた。エプ랄ル<sup>\*10</sup>とガーランドのジョン<sup>\*11</sup>も使われていた。しかし、アレクサンデル・ヘギウスとシンテンが、よりよき文学のいくらか *aliquid melioris litteraturae* を導入し始めていた。ようやくシンテンの授業を聞いていた上級の仲間たちを通して、初めてよりよき学問の香りを知ることができた。その後、ヘギウスの話を聞く機会も幾度かあったが、それは祭日での全校生徒に対する講演のみだった<sup>\*12</sup>。

このようにエラスムスは、中世のラテン文法家の教科書による授業が行われる中で、よき文学、よき学問と呼ぶべきものが紹介され始めていたと述べている。エラスムスが、そのよき学問を導入していた教師として上の引用の中で挙げているヘギウスとシンテンは共にルドルフ・アグリコラの仲間であり、彼からヒューマニズムの感化を強く受けていた。ヘギウスとシンテンは教壇に立つだけでなく、学校での教材や他の著作などを自分たちで著し、出版にも積極的であった。彼らの著作は中世の哲学や文法の伝統を受け継いでいる側面と新しいヒューマニズムの影響を受けた側面を併せ持つものであったという。

ヤン・シンテン Jan Synthen (d.1498) は低地地方東部のデルデン Delden 出身で、デフェンテルの共同生活兄弟団の一員であり、いくつか文法書を書いている。とくにヘギウスとともに出版した文法書は、文法の規則を説明するだけでなく、言葉の用法をラテン作家のテキストを参照しながら解説する手法をとっていたという<sup>\*13</sup>。エラスムスがこれらの文法書をどれほど知っていたかは分からないが、シンテンのクラスの生徒からエラスムスを感じたよき学問の香りとは、そのような方法であろうと想像できる。

アレクサンデル・ヘギウスは、1483 年から 1498 年の間、デフェンテルの学校の校長を務めた人物だが、先の引用から分かるようにエラスムスが直接

指導を受けるような機会は少なかったようだ。ヘギウスは、ルドルフ・アグリコラにギリシア語の手ほどきを受けているが、アグリコラよりも10歳年長である。ヘギウスがアグリコラに宛てた書簡には、イタリアのヒューマニストの中でもエラスムスが最も影響を受けたとされるロレンツォ・ヴァッラ<sup>\*14</sup>の著作の感想が見られる<sup>\*15</sup>。

### I.3 ルドルフ・アグリコラ

シンテンとヘギウスにヒューマニズムの感化を与えたルドルフ・アグリコラは、エラスムスの在学中にデフェンテルの学校を訪れている。後年(1523年)、エラスムスは次のように述懐している。

ルドルフ・アグリコラは、イタリアから我々のもとに、よりよき文学の微風をもたらししてくれた最初の人物だった。私が12歳<sup>\*16</sup>ぐらいの少年のころだったか、彼をデフェンテルで偶然見たことがあった。ただ見ただけであったが<sup>\*17</sup>。

低地地方出身者として、イタリアに学んだアグリコラが、エラスムスの目にあこがれの人物と映ったことは想像に難くない。アグリコラは1469年にはすでにイタリアを訪れていた。それから途中に二度の帰郷による中断をはさむが、およそ10年間、イタリアに滞在した。はじめはパヴィア大学で学び、続いてフェッラーラではバッティスタ・グアリーノのもとで学んでいる。バッティスタはグアリーノ・ダ・ヴェローナの息子であり、エラスムスが『自伝』で父が講義を聞いたと書いていたのもこのグアリーノ親子のどちらかを指していると考えられる。エラスムスは間接的に最も進んだヒューマニスト教育者とのつながりを持っていたことになる。

ここで、アグリコラが書き残したものを一つ見ておきたい。彼が友人ヤコブス・バルビリアヌス Jacobus Barbirianus (1455-1491) に宛てた書簡で、どのように「自分の学問を築き上げ、形づくる *studia tua instituere atque formare*」かを問いかけてきた友人に対する返事となっている。アグリコラは、何を学ぶべきかという内容の選択、そしてどのように学ぶべきかという

学問の方法を説いている。学ぶべきものについては、徳にかかわるものと事物の本質にかかわるものの二つにわけて論じ、そして学ぶ方法として、どのように理解し、記憶し、そして独自の考えを生みだすかを教えている。そして独自の考えを生み出していく方法については主著である『弁証法的発想論』*De inventione dialectica* にさらに詳しく論じたと述べている。そして最後には友人に学問に挑戦するように呼びかけ、アグリコラ自身、新たに決意してヘブライ語を学び始めたと報告している。この書簡は1508年にデフエンテルのヤコブス・ファベル Jacobus Faber (1473-1517) によって出版され、1511年にはピーター・ヒレス Pieter Gilles (1486-1533) の編集のもとディルク・マールテンス Dirk Martens (d. 1534) が出版して、『学の形成』*De formando Studio* と呼ばれて広く読まれるようになる。

ここで見るのは何を学ぶべきかを論じる中で、「われわれが学芸と呼ぶところのもの *quas uulgo artes iam uocamus*」、なかでも人間の行いと徳の指針を探求するために学ぶべき学問を挙げてゆく箇所である。

もし君が、それらを探求すること自体誉れ高いものであると信じ、またそれらに見合う資質が自分にあると慎み深さをもって考えるなら、というのも放縱になればどんなに少なくとも多いと感じ、どんなに多くても足ることを知らないからですが、私は、君は哲学に専心するべきだという意見です。つまり、あらゆる物事について正しく考え、考えたことを適切に表現できるように努めるということです。

正しく考えることには二つの側面があります。われわれが探求する物事に二つの側面があるのと同様です。まずわれわれの行いと徳に関するものがあります。これらは正しく適切に人生を生きていくためのすべての方途に深く結びついています。そのようなことを教える哲学の部門は道徳の哲学と呼ばれています。これがわれわれにとって最も大切なものだとよくよく考えなければなりません。しかし君はこれを、これについて書いた、アリストテレス、キケロ、セネカ、そのほかのラテン語で書いた、もしくは読むにふさわしいラテン語に翻訳されている哲学者たちからだけでなく、歴史家、詩人そして弁論家たちからも求めなければなりません。彼らは善き行いを称えることによって、また逆の行いを非難することによって、直接教えはしないものの、例を示して、きわめて効果的に、正しいものとそうでないものを、鏡に映すように見せるからです。このような歩みを通し

て、聖書へと向かうべきであり、その指示に従ってわれわれの人生を整えるべきなのです。そのきわめてありがたい導きによってわれわれの救済も信じることができます。他の者たちによって伝えられ残されたものにはすべて、いくらか誤りが混ざり込んでいます。彼らは、正しくまったく誤りのない人生の行路を教えることができません。というのも人生にどのような目的が置かれているか知らないか、あるいは、雲を通して見ているようなもので、それを信じているのではなく、より確かなことを推測して言っているに過ぎないからです。しかし、聖書は、それを与えた神がそうであるように、あらゆる誤りから遠くかけ離れています。そして唯一、われわれを確かでゆるぎない正しい道へと導き、すべての闇を打ち払って、従う者たちが騙されたり、脱落したり、さまよったりすることを許さないのです。<sup>\*18</sup>

（ヤコブス・バルビリアヌス宛書簡、ハイデルベルク 1484 年 6 月 7 日）

ここで挙げられているのは、まさしく *studia humanitatis* である。哲学は正しく考えることであるとしながら、なかでも正しく生きるための「道徳の *moralis*」哲学こそ最も重要であるとしている。さらに歴史家、詩人、弁論家からも学ぶように説いている。文法とレトリックが弁論家の学であれば、まさに文法・レトリック・歴史・詩・道徳哲学のフマニタス研究をすべて挙げていると言える。

次に注目したいのは、「このような歩みを通して *per hec gradus*」聖書に向かうべきであるとしてそのような学問が聖書の理解あるいは信仰の深化の準備・前段階として捉えられていることである。はっきりと「異教の」とは述べてはいないものの、聖書のみが誤謬なくあらゆる点で正しいという強調の背後には、フマニタス研究が異教のものであることへの意識が感じられる。本稿最終節で見る 5 世紀のリヨンの司教エウケリウスの、聖書のみが正しいとする主張とは言葉は似ているが、まるで立ち位置が違うように感じられる。二人とも聖書以外の思想は誤っていると述べているが、アグリコラはこの書簡で、学芸を修めることを通して自分独自のものを生み出すことまで強く説いているのに対し<sup>\*19</sup>、エウケリウスは哲学者たちから得られる生きる指針など全く役に立たないと否定している。

このアグリコラの書簡で、次のような雄弁の強調、いかに表現するかを重

んじている点にも注目しておきたい。

ゆえに、これら、私が述べたわれわれの徳と事物の本質に関することすべてを、知るに値する事柄に雄弁の輝ける光を加えた作家たちから学ぶべきです。この一つのこと、事物についての知識に加えて、それに劣らず重要と私が考える、適切に表現する方法を獲得できるでしょう。これについては多くの最高峰の人たちが、指針を残していることは君も知っているでしょう。<sup>\*20</sup>

この個所に続けてアグリコラは、この点については自分たちが若いころに習ったことはすべて疑うべきであると説いている。このような点にも、アグリコラのアルプス以北におけるヒューマニズムの先駆者としての顔を見ることが出来る。

エラスムスがデフェンテルでアグリコラを見たのが 1484 年の 4 月のはじめであるなら<sup>\*21</sup>、このアグリコラの書簡が書かれたのは 1484 年 6 月 7 日であるから、その間は二カ月ほどである。当時 17 歳のエラスムスがこの書簡を読むことはなかったであろうが、ヘギウスやシンテンが共有していたと思われる理想の一端を示すものと言えるだろう。アグリコラがこの書簡の写しをヘギウスにも送っていることから<sup>\*22</sup>、十分考えられることである。

エラスムスは 1489 年の友人宛ての手紙の中で、自分の先生であるヘギウスの先生としてアグリコラの名を挙げ、その学識を称えている<sup>\*23</sup>。またエラスムスは 1508 年『格言集』の第三版においてもアグリコラをアルプス以北最初の偉大な学者であると称える文章を書いている<sup>\*24</sup>。そして死にいたるまでアグリコラの遺稿を集める努力をし<sup>\*25</sup>、最期までアグリコラに対する尊敬の念を失うことはなかったようである。

## Ⅱ．修道院の中の異教文学

1484 年の夏、デフェンテルがペストに襲われたとき、エラスムスの母が亡くなってしまう。エラスムスはハウダに戻るが、そこで間もなく父ヘラル



トも死んでしまったので、兄のペトルスとともに後見人に預けられることになった。エラスムスは大学へ行くことを強く望んでいたが、この兄弟を宗教生活に捧げようと思っていた後見人たちは、ひとまず、エラスムスと兄ペトルスを共同生活兄弟団が運営するセルトーヘンボスの学校にやった。エラスムスはこの学校で3年近く過ごすことになる。エラスムスはこの時期を振り返って、その年月は無駄であり<sup>\*26</sup>、そこでの教育は少年たちを修道院へ向かわせるためだけのものだったと書いている<sup>\*27</sup>。

結局、エラスムスは後見人たちの圧力に屈して、大学へ行くことをあきらめ、1487年ころ、ハウダ近くのステイン Steyn にあるアウグスチノ修道祭式者会 Augustinian canons の修道院に入ることになる。エラスムスは、ステインを選んだ理由の一つとして、そこにデフェンテルの学校以来の友人がいて、古典文学と一緒に学ぶ機会があることを知らされていたと『自伝』の中で述べている<sup>\*28</sup>。エラスムスは、修道院入りする以前にも訪れて蔵書なども自分で見て知っていたようだ。また、ステインの修道院にはエラスムスの父が残した写本がいくつか保管されていたという推測もなされている<sup>\*29</sup>。

エラスムスが残したもののなかで最も古いものが、この修道院に入ったところにかかれたとされる詩や書簡である。それらからは、エラスムスが友人と文学の楽しみを分かち合う様子がうかがえる。ここでは主な文通相手であったセルウァティウス・ロゲルス Servatius Rogerus (d. 1540) とコルネリス・ヘラルト Cornelis Gerard (c. 1460-c. 1531) のそれぞれとのエラスムスの交流を見ていきたいと思う。

## Ⅱ．１ セルウァティウス・ロゲルスとの交流

セルウァティウス・ロゲルスはエラスムスと同年輩のステイン修道院の同僚で、しかも同じロッテルダム出身であった。彼はエラスムスが修道院に入っただけのころの最も親しい友人であったようだ。エラスムスは兄ペトルスに宛てた書簡でセルウァティウスについて「誓って言いますが、彼は若くとても美しい気質と喜ばしい才能を持っていて、私にもあなたにも子供のころ

から最も大きな喜びを与えてくれたあの諸学問もよく学んでいます」<sup>\*30</sup>と書いている。しかしエラスムスの文学と友情に対するあまりの熱情についていけなくなったのか、次第にセルウァティウスはエラスムスの書簡に応えなくなっていったようだ。エラスムスは手紙を書くように熱烈に呼びかける書簡も残している<sup>\*31</sup>。しかしセルウァティウスの態度は変わらなかったようである。エラスムスは修道院時代最後のセルウァティウス宛ての書簡の中で次のように書いている。

第一に私に対して心を開いて生きることが最も大切だ。君は、ほんとうに友の間に隠すべきものがあるなどと考えているのか。我らがホラティウスは、友情を帯を緩めることと表現しているが<sup>\*32</sup>、君はある種の偽りの帯のようなもので自分自身を縛ってしまっている。実際、君が誤りに導かれているか、あるいは、「友とは二つの肉体を持つ一つの魂だ」と言った者が、友を正しく定義できなかったかのどちらかだろう。だから、君が私と心を共にすることは、努力に値することだと私は思う。疑問に思うことを尋ねたり、知らないことを告白するのを恥ずかしがることはない。第二に、何よりも、私に今よりもっと頻繁に書くことが、君の前進に役立つだろう。他人からもらったような文章を用いたり、さらにひどい場合は、ここはベルナルドゥスから、あそこはクラウディアヌスからとあちこちから集めて、まるでカラスがクジャクの羽根をまとうように、自分のものに不適切に継ぎ接ぎするような以前の君のやり方はやめることだ。それは文章を作るのではなく、寄せ集めだ。また私が、君自身から出たものと他の源泉から出たものを見分けられないほど、鈍く愚かであると思わないでほしい。むしろ、君自身の能力に従って頭に思い浮かぶことを何でも、できれば即座に、書いたらいい。不適切な言葉遣いが、もしあっても、恥じることはない。私を嘲笑する者などと思わず、修正する者と思ってほしい。隠されている傷口を、どうやって治療すればよいのか。なぜ、君の中にあるものを、君自身よりも明らかにまた確かに知ることができる人間に対して隠そうと努めるのか。もし私から逃れたとしても君の中にあることが知られないからといって、君の中に無いことになるだろうか。<sup>\*33</sup>

(Ep.15 セルウァティウス・ロゲルス宛 ステイン 1488年ころ)

ここに見られるように、エラスムスにとって、友情というものは文学と深く結びついていた。さらに進んで、友人というものを、自分自身の文章をものするという文筆修業を競い合う相手と考えていたことが読み取れる。

エラスムスは修道院にいる間に、25 篇ほど詩を書いているが、そのうちのひとつに、つれない恋人に恋焦がれる羊飼いを題材にした『牧歌』*Carmen Buccolicum* がある。ヴレデヴェルト Vredeveld の註解によれば、詩の背後にはセルウァティウス・ロゲルスに対するエラスムスの熱烈な友情があるという。先ほど見たように、残された書簡からは、エラスムスが文学の楽しみを分かち合う友として呼びかけても、セルウァティウスは文学にそれほど興味を示さず、エラスムスの友情に応えようとしない様子が見える。そのつれなさへの嘆きを託して歌われたものが *Carmen Buccolicum* というのである<sup>\*34</sup>。将来（1514 年）には修道院長となったセルウァティウスが修道院の外で活動するエラスムスに対して帰還を要請する書簡を送るが、エラスムスは修道院は自分の帰るところではないと返事をするようになる<sup>\*35</sup>。

ヴレデヴェルトの詳細な註解<sup>\*36</sup>をみると、エラスムスが、ただウエルギリウスやオウィディウスなどの古典の詩人たちに範をとっているだけでなく、イタリアのヒューマニストたちからも深く学んでいたことがよくわかる。そこで指摘されているのは、まずボッカッチョ Boccaccio (1313-75) の *Carmen Buccolicum* である。これは 1504 年まで出版されていないので、ヴレデヴェルトはエラスムスの父が写本を持ち帰ったのではないかと推測している。そしてマルティーノ・フィレティコ Martino Filetico によるテオクリトスの牧歌の翻訳からも、いくつものフレーズが借用されている。このようにウエルギリウス、オウィディウス、ボッカッチョ、そしてフィレティコによるテオクリトスの翻訳を模倣するやり方は、15 世紀のイタリアの詩人たちの数多くの牧歌の中にみられる手法であるという。そのなかでエラスムスが参照したと思われるものが、1485 年 6 月にローマで出版されたアントニオ・ジェラルディーニ Antonio Geraldini の *Carmen Buccolicum* と 1485 年 11 月にフィレンツェで出版されたアンジェロ・ポリツィアーノ<sup>\*37</sup> Angelo Poliziano (1454-94) の *Sylva* で、対応する表現の類似箇所が、いくつも見出され、それぞれその箇所が指摘されている。

## Ⅱ.2 コルネリス・ヘラルトとの交流

つづいてコルネリス・ヘラルト (c.1460-1531) との交流を見ていきたい。コルネリスはハウダに生まれ、デフェンテル、ケルン、ルーヴァンに学び、パリで学士、修士の学位を得ている。おそらく1486年に修道士となり、1488年までにはライデン近郊のロプセン Lopsen のアウグスチノ修道祭司者会の一員となっていた。1497年には聖ヴィクトル修道院の刷新を支援するためにパリに派遣され、1508年には皇帝マクシミリアンから桂冠詩人の称号を与えられている<sup>\*38</sup>。修道士としてもすぐれ、そして文学的素養も豊かな人物だったといえるだろう。おそらく1489年ころエラスムスはコルネリスの詩人としての評判を知り、手紙や自作の詩を送ったと推測されている。コルネリスは先ほどのセルウァティウスとは違ってエラスムスの文学熱を理解できる相手だった。

エラスムスは、自分の詩作が妬まれ妨害されていることを嘆く詩をコルネリスに送った。このことはエラスムスが修道院の仲間たちからその文学熱を修道士としては行き過ぎたものとして非難されていたことを推測させる。コルネリスはそのエラスムスの詩に加筆して「野蛮人に対するヘラスムスとコルネリスの弁明」*Apologia Herasmi et Cornerii aduersus barbaros*<sup>\*39</sup> という新たな詩を作り上げた<sup>\*40</sup>。コルネリスが加えた内容は宗教的な題材を詩作に取り上げるようにとの忠告であり、エラスムスが送った詩がギリシア神話を下地にしてもっぱら異教古代の題材ばかりを扱っているのと対照的である。コルネリスの詩句には、ヒエロニムスも強調した、旧約聖書に見られるダヴィデが異教の民族から戦利品を得たこと (サムエル記下12:30) やホセアが姦淫を犯したゴメルを妻としたこと (ホセア書1-4)、またアウグスティヌスが『キリスト教の教え』(第二巻40章) で論じた、イスラエルの民がエジプトから逃れるとき金銀・装身具を持ち出したことなどが謳われている。つまりコルネリスは、エラスムスにキリスト教を称える詩を作ればよいと教えたわけである<sup>\*41</sup>。しかし、エラスムスはすぐにコルネリスの忠告に従ったわけではないようである。宗教詩へといざなうコルネリスに対して

エラスムスは手紙の中で自分の愛する作家たちを列挙している。

私は次のような人たちを手本とすべき指導者として仰いでいます。もしあなたには他の人たちがそうであっても、私は気に病みません。詩における私にとっての権威は、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、ユウェナリス、スタティウス、マルティアリス、クラウディアヌス、ペルシウス、ルカヌス、ティブルス、プロペルティウスです。また、散文においてはキケロ、クインティリアヌス、サルスティウス、テレンティウスです。さらに並ぶ者のないその優雅を守ることににおいてはとりわけロレンツォ・ヴァッラに頼っています。鋭い知性と記憶力において彼に匹敵する人はいないことを認めざるをえません。以上の作家たちによって用いられない言葉遣いはどんなものでも公にするものに用いるつもりはありません。あなたが他の人たちを加えていても非難したりしません。<sup>\*42</sup>

(Ep. 20 コルネリス・ヘラルト宛書簡 ステイン 1489年? 5月15日)

ここで「他の人たち」と言われているのは宗教的な題材を扱う作家をさすと考えるのが自然だろう<sup>\*43</sup>。コルネリスが詩の中で示した忠告に対してははっきりと自分の文学の好みを述べている。エラスムスが宗教的な題材を詩に取り上げるようになるのはまだすこし先のことである。

いま掲げた書簡 Ep.30 にロレンツォ・ヴァッラの名前が登場したように、コルネリスと交わされた他の書簡からも、イタリアのヒューマニストへのエラスムスの傾倒ぶりがうかがえる。コルネリスが、当時パリで活躍していたヴェネツィア生まれのジローラモ・バルビ<sup>\*44</sup>を古代の文学を受け継ぐ唯一の人物であるかのように称えたことを受けて、エラスムスはルドルフ・アグリコラやアレクサンデル・ヘギウスなどの身近な低地地方の人物たちの名を挙げてから、さらにイタリアのヒューマニストたちに言及していく。

さらには、イタリアに目を向けるなら、ロレンツォ・ヴァッラやフィレルフォ<sup>\*45</sup>よりも古代の雄弁を敬っている者がいるでしょうか。エネア・シルヴィオ<sup>\*46</sup>、アゴスティーノ・ダティ<sup>\*47</sup>、グアリーノ、ポッジョ<sup>\*48</sup>そしてガスパリーノ<sup>\*49</sup>よりも雄弁な者がいるでしょうか。そして彼らが皆我々の時代まで生き残っていることについて疑いを挟む者はいません。<sup>\*50</sup>

(Ep. 23 コルネリス・ヘラルト宛書簡 ステイン 1489年? 6月)

エラスムスはこの後に、絵画や彫刻の優れた作品が再び生み出されるようになったように雄弁もまた復活しつつあることを喜びながらも、愚かな教育者によってよいラテン語が減ばされそうになっていると嘆き、続けて次のように述べている。

われらがロレンツォ・ヴァッラとフィレルフォが称賛すべき学問的努力によって、ほとんど消えかかっていたときに死より救い出してくれた。『ラテン語の優雅さ』というヴァッラの著作を読めば、彼がどれほど情熱的に、野蛮な人々の愚かな考えを論駁するために、そして、長い間埋もれ忘れ去られていた、弁論家と詩人たちへの皆の敬意を復活させるために戦ったのかをあなたも知るようになるでしょう。<sup>\*51</sup>

(Ep. 23 コルネリス・ヘラルト宛書簡 ステイン 1489年? 6月)

このようなエラスムスの態度にコルネリスは、ヴァッラには敵が多く、雄弁に長けたポッジョ・ブラッチョリーニまでもが敵対した。そのような作家のものを学ぶと皆に嫌われてしまう。君は友人にそんなことを勧めるのか、とヴァッラへの傾倒ぶりを冷やかす内容の書簡を書いている<sup>\*52</sup>。エラスムスも相手が冗談半分と知りながら、まじめにヴァッラの擁護を長く論じてから次のように述べる。

強烈な勤勉と努力と活動をもって、野蛮な人々の愚かさや戦い、埋もれかかっていた文学を消滅から救い、イタリアにその古代の雄弁の栄光を取り戻し、そのうえ学者たちに、これから先はもっと注意して自分の考えを表現するように忠告してくれたヴァッラを、大いに称えようとも、出来得る限り愛そうともしないほど精神が貧しく、狭隘な心の持ち主が、どこにいるのでしょうか。<sup>\*53</sup>

(Ep. 26 コルネリス・ヘラルト宛書簡 ステイン 1489年? 7月)

これらの書簡からわかることは、エラスムスもコルネリスもイタリアのヒューマニストたちについてかなりの知識があったこと、それからヴァッラに対するエラスムスの心酔ぶりである。この書簡が交わされた1489年の夏ごろには、ライデンのある教師のためにヴァッラの『ラテン語の優雅さについて』*Elegantiarum linguae Latinae libri*の摘要を作っている<sup>\*54</sup>。これもま

たこのころのヴァッラへの傾倒ぶりを示す出来事と言えるだろう。

以上のようにコルネリスはエラスムスにとって詩を共作したり、またイタリアのヒューマニストたちについて議論を戦わせたりすることができる友であった。さらには年長の修道士としてエラスムスを導く役割を果たしたとも考えられる。先ほどの引用まではエラスムスは、コルネリスに対して自らの意見を主張していたが、コルネリスの感化が強く表れていると思われる書簡を以下に二つ取り上げたい。

再び、あなたのためにこの仕事を再開し、あなたに頼まれたあなたの演説を、できるかぎり熱意を注いで完成させました。さらに演説の区別、同様にそれぞれの特徴を持つそれぞれの形式について、注をつけることにも細心の配慮をしました。そうすればあなたは望みをかなえ、学問のある人はわたしの熱意を称え、無学の人は妬み、自慢気な似非学者は顔を赤らめ、そして凡庸な人はいくらか恩恵を被るでしょう。わがコルネリスよ、あなたはいたるところでこのような類の人たちを目にしましょう。本当に学問のある人は、文学を賞賛せずにいることも愛さずにいることもできません。

しかしあらゆる学芸に無知な人たちは、すべてを非難、破壊、罵倒すべきものと考えていて、自分たちが知らないことへの賞賛は許さず、自分たちが知っていることに過ちがあることは認めません。全く抜け目のないことに、自分たちには偉大なものは何も欠けていないと思わせるために、自分たちに欠けているものは何でも小さいものとみなすのです。このような人たちの意見によれば、なんとキケロが野蛮人で、エプラーが教養ある人なのです。なぜかと言えば、まさに彼らは後者を知っていますが、前者を知らないというだけのことなのです。<sup>\*55</sup>

(Ep. 30 コルネリス・ヘラルト宛書簡 ステイン 1490年?)

ここでの「あなたの演説」とは『反蛮族論』の原型あるいは最初の段階のものと考えられている。つまり後に対話編に書き直される前の『反蛮族論』はコルネリスの演説という形をとっていた。このことの背景として、先に見たエラスムスの嘆きの歌を野蛮人に対する弁明に変えたコルネリスの詩が大きな影響を与えることになったことは想像に難くない。ヒエロニムスが旧約のゴメル話を引き合いに出して、またアウグスティヌスが「エジプトの器」を根拠にして、異教の学問を信仰のために用いることを説いていることはエ

ラスムスが『反蛮族論』で異教文学を擁護するうえでの大きな支えとなっている。コルネリスが書き加えた詩句の中には「囚われの女性」も「エジプトの器」も見られる。さらにこの書簡 Ep.30 に見られる「学芸を知らないがために非難する者」は、『反蛮族論』の中で文学の敵の典型として描かれている。コルネリスとの交流から『反蛮族論』が誕生したというのは言いすぎだとしても、大きなきっかけを与えたことは間違いない。

ちなみにその『反蛮族論』の原形のテキストは残っていないが、トレイシー Tracy が、1495 年に対話編に書きかえられたとされる段階のテキストの内的な要素、たとえば登場人物の議論の齟齬やエラスムスの言葉遣い・考え方の変化などから推測して再構成を試みている<sup>\*56</sup>。それによると初稿段階の演説『反蛮族論』には、文学の衰退を嘆きその原因である教師の無知を糾弾するなどヴァッラの『ラテン語の優雅さ』の強い影響がみられ、対話篇『反蛮族論』では異教文学のより広い積極的な意義が見出されており、エラスムス独自のものとなっているという。

ヴレデヴェルトによれば、1490 年から 1491 年にかけて、エラスムスは宗教的な題材を詩に取り上げるようになる。イエスの誕生を祝う歌、イエスの祖母聖アンナを讃える歌、ステイン修道院の守護聖人大グレゴリウス一世（教皇在位 590-604）をたたえる歌（De casa natalitia pueri Iesu, In laudem Annae, In laudem beatissimi Gregorii papae）などである。ヴレデヴェルトはこれをコルネリスの感化のためであるとみて<sup>\*57</sup>、そしてヴレデヴェルト自ら執筆時を 1491 年 3 月<sup>\*58</sup>に位置づけなおしたコルネリス宛ての書簡の次の個所に注意を向けている。

とはいえ、あなたが優しく忠告してくれたので、今後は、聖なる人たちへの賛嘆や、聖なるもののそのものの息吹を感じないものは書かないと決めました。もし私があなたに贈った詩の中で、異様に弱々しい歌い方をしていると思われるものがあっても、あなたの寛大さは、それらが書かれた時期を考慮してくれば、きわめて容易に許すことができるでしょう。というのも、あなたの手紙が手元に届けられたときの抒情詩と私が散文も書くことができることをあなたにちゃんと分



かってもらうために、あなたに贈ろうと思って最近書いた哀悼の演説、そして一つの風刺、これらのほかはすべて、まだ子供で、依然としてほとんど世俗の人間であった頃の私によって書かれたものですから。<sup>\*59</sup>

(Ep. 28 コルネリス・ヘラルト宛書簡 ステイン 1491年3月)

この書簡のエラスムスは、もはや異教の文学をそのまま楽しみ、あるいは模倣するような詩人には見受けられない。その異教文学をキリスト教信仰との関係を深く意識しながら見るようになったのではないか。そのような緊張関係を自覚していないような創作はもうしないとの宣言とも受け取ることができるように思われる。実際エラスムスの詩の題材は、青春のはかない美しさや友情を謳うものから、宗教的さらには道徳的なものへと変わっていくという。この書簡に見られる風刺も「死すべき人間の誤りを避け、真の信仰へと勧める歌」*Elegiae Protrepticae, Detestantes Errores Mortalium et Adhortantes ad Veram Pietatem* と題されている<sup>\*60</sup>。

このような変化の原因をコルネリス一人との交流に帰することには無理があるだろう。またこののちもエラスムスは古典文学の研究に積極的に没頭していくのであるから、文学を捨てたわけでもない。しかしエラスムスにとってキリスト教信仰を深めるようなことが何かあったのではないか。もう子供でも世俗の人間でもないとの表現がそのことを感じさせる。しかしエラスムスにとって修道院にいながら文学を探究し続けるうえでコルネリスの存在は大きな支えであり、信仰の上での導きの一つであったことは間違いない。コルネリスとの交流は、エラスムスが修道院を出た後も続くが、コルネリスがパリの修道院改革の支援から戻ってからは二人の関係は疎遠になったようだ。1498年に書かれたエラスムスからの手紙にコルネリスは答えなかった<sup>\*61</sup>。

### Ⅱ．3 『世の蔑視について』 *De Contemptu Mundi*

エラスムスは修道院に入って4年ほどした1491年春ごろに<sup>\*62</sup>、『世の蔑視について』*De Contemptu Mundi*を書いた。この著作は、テオドリクスという名の人物が甥ヨドクスに修道院生活を勧めるという形式をとっている。

全 12 章からなり、前半 1 章から 7 章までは、世俗的な価値の否定となっており様々な現実世界における欲望に対する警告が説かれている。後半 8 章から 11 章までは隠遁生活の賛歌で、修道院への勧誘となっている。第 12 章は、第 11 章までとは反対に修道院批判の内容となっている。このために、第 12 章はエラスムスが修道院を出た 1492 年以後かなりの時間を経て書かれたものと考えられている<sup>\*63</sup>。『世の蔑視について』が出版されるのは 1521 年である。

「世の蔑視」というのは新しいものではなく、キリスト教のなかではすでに伝統的なものであった。有名なものでは、インノケンティウス三世（教皇在位 1198-1216）のものやインノケンティウス三世が手本とした聖ベルナルドゥス Bernard of Clairvaux (1090-1153) のものがある。エラスムスが先人たちの作品をモデルにしたことは間違いない。エラスムスが『世の蔑視について』の主な手本としたのは 5 世紀のリヨンの司教エウケリウス Eucherius (d. 449) の『世の蔑視について』*De contemptu mundi* と考えられている。

二人の作品を詳細に比較検討したルンメルによればエラスムスの『世の蔑視について』は以上に挙げた「世の蔑視」の伝統を踏襲しており、主張するところで新しい内容は見られないという。しかし、エラスムスの新しい点は、修道生活を勧めるにあたって異教の古典を援用していることである<sup>\*64</sup>。聖書への言及やほのめかし、キリスト教教父の引用の他にプラトン、エピクロス、キケロなどの名を挙げて論じているのである。

エラスムスは、第 11 章「隠遁生活の楽しみ」*De Voluptate Vitae Solitariae* において、主に二つの楽しみを挙げている。一つは、神を思い、天国における永遠の幸福を思う瞑想であり、もう一つは、聖書や教父などのキリスト教の著作、さらには異教の古典などを読む楽しみ、つまり読書の楽しみを挙げている。エラスムスは読者ヨドクスを説得するために、この瞑想と読書という二つの楽しみは世間的な楽しみに比べて、より永続的で深い喜びが得られるものだと訴えるが、このためにエピクロスの考えが援用されている。つまり、瞬間的な快楽（楽しみ）ではなく、永続的な快楽こそ求めるべき真の快

楽であるという考え方である<sup>\*65</sup>。次のような箇所が見られる。

肉体の楽しみと精神の楽しみを同じく味わうことはできず、どちらか一方をあきらめなければならない。思慮深いエピクロスは、これについてどんな助言をしてくれるだろうか。それはもちろん、より素晴らしく甘美な精神の楽しみを追い求める障害とならないように、あのような淫らな誘惑を退けることだ。これまで語ってきたように、これは楽しみを手放すことではなく、利益を生む取引なのである。<sup>\*66</sup>

伝統的な「世の蔑視」の作品は、聖書に言及しながら議論を展開するが、エラスムスは『世の蔑視について』のなかで異教の哲学者の説を援用して話を進めているのである。さらに、第 11 章において読書の楽しみを教えるところで次のような箇所がある。

もし源泉そのものからのものがよければ、両方の聖書が持ち出される。真実そのものによって美しく、さらに雄弁の輝きによってより美しいものを楽しむときは、ヒエロニムス、アウグスティヌス、アンブロシウス、キプリアヌスやこれらと同様のものにおもむく。また、まだ少し満足できず、キリスト教のケクロが聞きたくなればラクタンティウス・フィルミアヌスを抱きしめる。華美を排して節度ある食事を楽しみたいときは、トマスやアルベルトゥス、それら同様の著作を手にとる。もし、おまえが古いあの友人たちと永久に離れていることができないなら、時間のあるときに時々、彼らを再訪することも許されるだろう。ただし仲間としてではなく競争相手として振舞うように。それらの中にこそ、あの異国人ではあるが、面持ちの極めて美しい女性がいるのだ。その囚われの女性の毛と爪を切り落とせば、おまえは、娼婦を正式な妻とすることができる。したがっておまえは、多くの神秘を秘めた聖書と、預言者や使徒、解説者や博士たちの著作を手にすることができる。そして哲学者や詩人たちの書いたものも読むことができる。トリカブトの間から体によい草を集めることを知っている者はそれらを避けることはないのだから。<sup>\*67</sup>

この引用の最後の文が意味するのは、キリスト教信仰にとって有害にならなければ、異教の古典も読んでも構わないということである。このような花や植物に文学を譬えてよいものを選ぶという説き方は、ヒエロニムスやアウグスティヌスにも見られる<sup>\*68</sup>。エラスムスの態度もそれに従っているもの

といえるだろう。またその前の「囚われの女性」はコルネリスの詩でも見られた旧約聖書の事跡（ホセア書 1-4、イザヤ書 7:20、エゼキエル書 5:1）に根拠をおく異教のものを信仰に役立てるという考え方の象徴でこれもまたヒエロニムス（の書簡 70）から学んだものと思われる。

さきに見たような異教の哲学者の積極的な援用や異教文学の読書は、「世の蔑視」といったキリスト教的な題材のものでは、伝統的な枠を超えているように思われる。本来「世の蔑視」は人間世界にたいする蔑視であり、人間が作ったものに頼ることを拒むことである。エラスムスが手本としたエウケリウスの『世の蔑視について』のなかで異教の哲学者について述べられている個所を見てみよう。

それら哲学者たちの拒絶されるべき指針を読むことに労力と才能を用いるのではなく、キリスト教の教義を吸収しようという熱意に心を傾けなさい。そこでも同様に、お前の弁舌と才能が鍛えられることを知るだろう。そして、おまえにも、その哲学者たちの指針よりも、われわれの指針、つまり敬虔と真理の指針にどれほど従うべきか、ただちに明らかとなるだろう。というのも彼らの指針には、見せかけの徳や偽りの知恵が含まれているのに対し、われわれの指針には、完全な正義とゆるぎない真理が保たれているからである。ゆえに、他の者たちは哲学の名のみを用いているが、われわれはその命を用いているのだと言ってよかろう。実際、彼らからどんな生きるための指針が与えられようというのか。彼らは目的を知らない。そして神を知らないゆえに、正義の始原から遠ざかり、そのために当然、他のことにおいても誤りを生み出している。そうしてその後のそのような熱意の結末は虚しいものとなるだろう。彼らのうち、より美しいものに流れる者は、この見せびらかしに奉仕し、このために苦しむ。そのような者たちは、過ちを断つことができず過ちから免れることができないのだ。この者たちは、聖書に書かれているように、「地上のことばかり考えているのだ」（フィリピの信徒への手紙 3:19）。ゆえにその者たちが、本当の正義も、本当の知恵も知らないのはあまりにも明らかである。<sup>\*69</sup>

エウケリウスは、異教の哲学者がキリスト教徒に対して指針を与えることは出来ないとしている。ルンメルは、エラスムスの『世の蔑視について』はこの考え方に対抗するものだと指摘している<sup>\*70</sup>。実際、エラスムスはエウ

ケリウスと逆の態度を取っている。それは先に見たように「思慮深いエピク罗斯は、これについてどんな助言をしてくれるだろうか」と積極的にエピク罗斯の意見を聞いていることから明らかだろう。エラスムスにとって異教の哲学者たちから「生きるための指針」*praecepta vivendi*を汲み取ることができるかどうかは重大な問題である。まさに『格言集』で成し遂げようとしたのはこのことであり、その仕事はエラスムスの最期まで続けられるのである。

### むすびにかえて

以上に見てきたように1490年以前においてエラスムスは、古代の作家のものにしろ、イタリアのヒューマニストのものにしろ、多くのラテン語文献に触れることができていたということができるだろう。ステインの修道院にはキリスト教の著作だけでなく、古代の主な作家たちの作品もあったと推測できる<sup>\*71</sup>。本稿では詳しく扱わなかったが、修道院に入ったばかりの1487年に作られた詩の技法の習熟度からは、修道院に入る前にすでに古典作家だけでなくイタリアのヒューマニストの作品にもかなり親しんでいたことが推測される。修道院時代の書簡では、ウェルギリウスやキケロそしてヴァッラの名をあげて、これらの作家たちによって用いられない言葉遣いはどんなものでも用いるつもりはないと述べているが、これは後年、『キケロ主義者』(1528年)の中で、まさにキケロが用いなかった言葉を一切用いないようにする努力を徹底的にあざけて盲目的な模倣を否定したエラスムスとは対照的である。またエラスムスは1504年にヴァッラの『新約聖書校注』*Collatio Novi Testamenti*の写本を発見して翌年出版し、自身の新約聖書の校訂・翻訳の導き手としてゆくが、若いころは『ラテン語の優雅さについて』を通して、ヴァッラを古代の雄弁を復活させた英雄として心酔していた。

エラスムスは修道院時代を振り返ってその生活は全く自分の性質に合わなかったと述べているが<sup>\*72</sup>、コルネリスとの交流には、その後のエラスムス

の異教文学に対する考え方の礎となるような要素が見られ、また文学と信仰についての考え方にも変化をもたらすものがあったことをうかがわせた。

さらにさかのぼって少年時代についても、はじめに紹介した『反蛮族論』の序文の「学校では、よき文学 *bonae literae* は全く失われていて、本も教師たちの助けもなかった」との表現は、十分な交流はなかったけれどもアグリコラやヘギウスといったヒューマニズムを学び取っていた人々と近接していたことを示すエラスムス自身の回想と食い違い、やや大げさなものともいえる。ただ当時の少年エラスムスの文学への渴望に周囲が十分に応えられなかったということもできるだろう。その渴望を生み出すきっかけを与えたのは、イタリアに留学していた父ヘラルトだったとも十分考えられる。

本稿で見たエラスムスは、まだイタリアのヒューマニストたちを崇拜し、またヒエロニムスやアウグスティヌスといった教父に対してもその教えをただ受け入れているように見える。しかし修道院にいる頃から書き始められたという『反蛮族論』が、1495 年頃に書き直されて対話篇となったとき、そこにはエラスムス自身の姿が現れ始めているように思われる。その姿をはっきりと捉えていくことが今後の課題である。

#### 注

- 1 Aulus Gellius, *Noctes Atticae* 13.17, *The Attic Nights of Aulus Gellius* II, Loeb Classical Library 200 (Harvard University Press 1927) p. 456.
- 2 根占献一「ルネサンス・ヒューマニズムと近代 ——特にイタリアとドイツの視点から——」、『19 世紀研究』(8)、2014 年、59 - 73 頁。さらに詳しくは、同『フィレンツェ共和国のヒューマニスト ——イタリア・ルネサンス研究』、創文社、2005 年。
- 3 Erasmus, *Opus Epistolarum Des. Erasmi Roterodami*, ed. P. S. Allen, H. M. Allen and H. W. Garrod (Oxford: Clarendon Press, 1906-1956; reissued 1992) vol. 4, p. 278, ll. 2-11 (以下 Allen IV p. 278, ll. 2-11 のように記す)。
- 4 ロッテルダム出身の Gerardus Helias という名の写字生が 1457 年にイタリアにいたことを確認する二つの写本が残されている。Schoeck, R.J., *Erasmus of Europe: The Making of a Humanist 1467-1500* (Edinburgh University Press, 1990) pp. 28-29 and appendix A.
- 5 Allen I, pp. 47-48, ll. 18-29.

- 6 Allen I , p. 74, ll. 7-8, Ep. 1. 1484 年ハウダ Adhuc libri vaenum exponendi sunt, adhuc emptorem quaesituri, adhuc licitantem visuri. 本はまだ売りに出されています。まだ買い手を探しています。まだ値を付けてくれる人も見られません。
- 7 Bietenholz, Peter G., ed., *Contemporaries of Erasmus*, vol. 2 (Univ. of Toronto Press, 1986) pp. 147-48.
- 8 Schoeck, R. J., *Erasmus of Europe: The Making of a Humanist 1467-1500* (Edinburgh University Press, 1990) pp. 11, 47.
- 9 直訳「私の父」ラテン文法の語形変化の教科書といわれている。
- 10 エヴラル・ド・ベチューヌ。12 世紀のラテン文法家。著作 *Graecismus* はラテン文法書で、ギリシア語に由来するラテン語を解説している。1488 年パリで出版された。
- 11 John of Garland (c.1180-c.1258) パリで教えたイングランド人で、著作 *Dictionarius, Compendium grammaticae, Accentuarium* は標準的な教科書だった。
- 12 Allen I , p. 48, ll. 34-40. *Compendium Vitae Erasmi*
- 13 Schoeck, *op. cit.* , p. 52, Hyma, Albert, *The Youth of Erasmus* 2<sup>nd</sup> ed. (Russel & Russel 1968) pp. 108-09.
- 14 Lorenzo Valla (1406-57) 15 世紀前半における最も優れた批判的言語学者。
- 15 Agricola, Rudolph, *Letters*, ed., tr. and annot. Adrie van der Laan and Fokke Akkerman (Van Gorcum, 2002), pp. 232-33, Ep. 42(Hegius to Agricola, Dec. 7 <1484>), 7-8, lines 14-20. Legi librum Valle de uero bono, apud quem Vegius uoluptatis partes tuetur, Cato honestatis. Fecit Vegius me Epicurium.
- 16 実際は 17 歳と考えられる。幼いころの年齢についてのエラスムスの記述は信頼できない。Vredeveld, H., "The Ages of Erasmus and the Year of His Birth," *Renaissance Quarterly* vol. 46, 1993, p. 792.
- 17 Allen I , p. 2, ll. 24-27. To Botzheim.
- 18 Agricola, *op. cit.* , pp. 204, 1. 20 - p. 206, 1. 9.
- 19 Agricola, *op. cit.* , p. 212 ll. 28-30, ipsi preter hec inuenire aliqua possumus et confiscare, que nobis asseramus nostraque esse queamus affirmare.
- 20 Agricola, *op. cit.* , p. 208, ll. 8-12.
- 21 Vredeveld, H., "The Ages of Erasmus and the Year of His Birth," *Renaissance Quarterly* vol.46, 1993, pp.792-93.
- 22 Agricola, *op. cit.* , p. 200.
- 23 Allen I , p.105-106, Ep. 23.
- 24 ASD II -1, pp. 438-442.
- 25 Allen, P. S., 'The Letters of Rudolph Agricola,' *English Historical Review* 21, 1906.
- 26 Allen I , p. 49, *Compendium vitae*. Illic vixit, hoc est perdidit, annos ferme tres

in aedibus Fratrum

- 27 Allen II , p. 295, Ep. 447, To Lambertus Grunnius. vitaeque monasticae fingant
- 28 Allen I , p. 50.
- 29 Allen I , p. 74, note 2.
- 30 Allen I , p. 76, Ep. 3, ll. 33-35. cum Seruatio ] contrerraneo nostro, adolescente  
me hercule indole pulcherrima ingenioque suauissimo, earumque disciplinarum,  
quae cum me tum te a pueris apprime delectarunt, studiosissimo.
- 31 Allen I , pp. 86-87, Ep.13
- 32 Horace, *Odes*, 1. 30. 5, 6.
- 33 Allen I , p. 89, ll. 26-46.
- 34 *Collected Works of Erasmus*, vol. 86, *Poems* translated by C. H. Miller, edited  
and annotated by H. Vredeveld (Univ. of Toronto Press, 1993) pp. 617-18. 以下  
CWE 86, pp. 617-18 のように略す。
- 35 Allen I , pp. 564-573. 拙訳「セルウァティウス・ロゲルス宛書簡 (1514 年 7 月)」  
『創価大学人文論集』第 21 号、2009 年。
- 36 CWE 86, pp. 615-16, 618-25.
- 37 15 世紀後半のもっとも優れたヒューマニスト。フィレンツェでラテン語とギリシ  
ア語を教える。ロレンツォ・メディチの友人で彼の子供たちを教えた。
- 38 Bietenholz, *op. cit.*, pp. 88-89.
- 39 ASD I-7, pp. 268-282, CWE vol. 85, pp. 182-197. /ASD I-7, pp. 447-449,  
CWE vol. 85, pp. 364-367.
- 40 詳細は以下を参照。ASD I-7 edited by Harry Vredeveld (Elsevier Science  
Publishers b.v. 1995 ) pp. 45-60, CWE, vol. 85, translated by C. H. Miller, edited and  
annotated by H. Vredeveld (Univ. of Toronto Press 1993) pp. xlix-lix /notes CWE  
vol. 86, pp. 722-24.
- 41 コルネリスとエラスムスがやり取りした書簡と詩の内容については以下で一部を  
紹介した。拙稿「若きエラスムスとヒエロニムス ——『反蛮族論』における引用  
をめぐって——」、『エクフラシス』第 2 号、早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサン  
ス研究所、2012 年、111-116 頁。
- 42 Allen I , p. 99, ll. 96-106.
- 43 Heesakkers, Chris L., 'Erasmian Reactions to Italian Humanism,' *Erasmus of  
Rotterdam Society Yearbook* 23, 2003, p. 30.
- 44 Girolamo Balbi (c1460-1535?) ヴェネツィア出身のヒューマニスト *Epigrammata*  
(1486/87).
- 45 Francesco Filelfo (1398-1481) コンスタンティノーブルでギリシア語を学び、フィ  
レンツェでも教える。
- 46 Enea Silvio Piccolomini (1405-64) シエナで学んだヒューマニストで後のピウス



- 二世 (1458-)。
- 47 Agostino Dati (1420-78) シエナで活躍したヒューマニスト。フィレルフォのもとで学ぶ。
- 48 Poggio Bracciolini (1380-1459) フィレンツェのヒューマニスト。多くの古代写本を発見した。
- 49 Gasparino Barzizza (c1370-1431) パドゥアで修辞学を教える。
- 50 Allen I , p.107, ll. 73-77.
- 51 Allen I , p.108, ll. 100-106.
- 52 Allen I , pp. 110-111, Ep.24.
- 53 Allen I , p. 115, ll. 103-108.
- 54 Vredeveld, *op. cit.* , pp. 794-95.
- 55 Allen I , pp. 121-22, ll.15-30.
- 56 Tracy, James D., 'The 1489 and 1494 Versions of Erasmus' *Antibarbarorum Liber' Humanistica Lovaniensia* 20, 1971, pp. 81-120.
- 57 CWE 85, p. xix.
- 58 書簡の中で言及されているヘルマンズの行動と Zehender の詩集の出版年を根拠にしている。詳しくは CWE 86, p. 511.
- 59 Allen I , p. 118, ll. 8-17.
- 60 ASD I-7 , pp. 286-304, CARMINA 94, 95, 96.
- 61 Bietenholz, *op. cit.* , p. 89.
- 62 Vredeveld, *op. cit.* , pp. 757-63.
- 63 CWE 66, p. 131-133 Erika Rummel による注解。
- 64 Rummel, Erika, 'Quoting Poetry instead of Scripture : Erasmus and Eucherius on *Contemptu Mundi* ' *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance* XLV , 1983, n. 3, pp. 503-09.
- 65 エピクロスについてエラスムスはキケロの *De finibus* 1.8.28-1.21.72 の説明に依っている。CWE 66, p. 315, note1 参照。
- 66 ASD V-1, pp. 74-75, ll. 972-976.
- 67 ASD V-1, p. 80, ll. 96-108.
- 68 ヒエロニムス書簡 115. 1, 116. 2, CWE 66, p. 317, note36.
- 69 Migne, ed., *Patrologiae cursus completus, series Latina* (Paris 1844-64) vol. 50, p. 724 B.
- 70 CWE 66, p. 133, Introductory Note by Erika Rummel.
- 71 Hyma, A., *The Youth of Erasmus* 2<sup>nd</sup> edition (Russell and Russell, 1968) pp.164-66.
- 72 Allen I , pp. 564-573. 拙訳「セルウァティウス・ロゲルス宛書簡 (1514 年 7 月)」『創価大学人文論集』第 21 号、2009 年、77-78 頁。